

西之園君子著『大島紬の源流を探る』

(南方新社 令和3年9月刊 119頁)

---

松 元 久 明

はじめに

著者は鹿児島純心女子短期大学で長年にわたり教鞭をとり、教育課程の中に「大島紬研究」を位置づけ、その中で学生に大島紬の洋装製作を指導するとともに、本場大島紬織物協同組合の毎年の催しや大型商業施設でのファッションショー等、一般に向けて公共施設での作品発表を続けてきた。著者の退職後もその伝統は後任に引き継がれ、今日も学生たちによる大島紬の洋装製作・発表が活発に行われている。その一環として著者は大島紬の織元を訪ね、素材に適した大島紬があると価格交渉までしていた。大島紬の研究をする傍ら、大島紬の洋装製作は、元々織元から希望され、学生たちの熱意から生まれたと記されている。

鹿児島市や奄美大島は、戦災に遭い、いろいろな分野の資料を失っているため、本書のように大島紬の源流を探る研究は大変な苦労があったと考える。最近、大島紬の織を習っている女性から大島紬の歴史資料を捜しているが、なかなか見つからないから紹介してほしいと相談を受けたとき、すぐに本書を推薦することができた。じっさい、私も大島紬に携わった四十数年前、図書館や〔古〕書店を探し回った記憶がある。今はなくなっている天文館の古書店で『大島紬の歴史』という本一冊にやっと出会うことができた。私は大島紬の意匠設計に携わりながら、その後いくつかの資料に出合ったけれど、大島紬は奄美大島の歴史風物などの本の一部として書かれているようなものである。それに対してこの著作は大島紬に焦点を置いて書かれており、カラー写真や歴史的な挿絵(資料)を随所に用いながら、ありありと描かれている点で刮目に値する。

本書第一章「大島紬の源流を探る」では、第Ⅱ節「奄美大島の歴史と大島紬の変遷」、第Ⅲ節「大島紬の特徴」で、何と先史時代から昭和に到るまで、大島紬を軸にした奄美大島の歴史を概観する。それは住民の苦難の歴史と技術の進歩の過程である。

七、八世紀頃の遣唐使による文化や制度の導入の際は奄美大島を経たこと、奄美大島はこの時代大和朝廷と交易があり、669年には奄美人が方物を献上した記録があり、聖武天皇が建立した東大寺の献物帳に「褐色紬」があること等、これらは大島紬の起源を知る上で重要な事柄である。一方、奄美や沖縄は中国や南方諸国と交易があり、織物が日本本土を通らず直接伝わったと考えられる。唐朝に作られていた綾織の領巾(サザ)が後年発見されている。

九～十世紀の奄美大島は豪族による支配がなされ海を通じての交易が盛んだったことが遺跡から立証されている。

十五世紀になると、奄美大島は琉球王朝の支配下となり、琉球文化の強い影響を受ける。共通の信仰があり精神的文化的に安定し豊かな生活であったことが推測される。この頃は琉球にも緋が伝わり、さらに奄美にも伝わったと考えられる。近年の石橋財団の調査で、緋はインドが発祥と断定された。現代の大島紬にもこの緋が使われていることが大きな特徴であり、世界で最も微細な緋と言われる。東ねた糸を別の糸で括り、全体を染めるとその部分が染まらないという手法で文様が生まれる。皆、ハンカチを輪ゴムで括って染めた経験があると思うが、それと同じである。琉球緋、久留米緋、四国の伊予緋、山陰の弓ヶ浜緋、茨城、栃木の結城紬さらには米沢には米琉という琉球風の緋織物がある。南から北の方へ技術が伝播していった様子が分かる。

十七世紀から十九世紀半ばの奄美大島は薩摩藩の直轄地となった。豊かな琉球に属した時代から暗い時代を迎える。奄美人の同化を許さず、沖縄本島への往来の禁止、衣装までも琉球風に規制し、ひいては一字姓にするなど横暴と言わざるを得ない。琉球の製糖技術を導入し、砂糖きびの農民への強制割り当ても始まる。甘味として日本本土で珍重がられ、米より利益が大きいので厳しく管理し上納させられた。「黒糖地獄」といわれ、納められないとヤンチュ(奴隷)となった。黒糖を勝手に売れば死罪となる。この過酷な黒糖政策には、薩摩藩の様式兵器購入など

の多大な出費による財政難が背景にあった。このような薩摩藩の圧政は、奄美大島の歴史の中で最も心が痛む事柄である。薩摩藩は琉球へ侵攻した時には、接収した琉球漆器を幕府への献上品として使っている。声をかけるとち密な作業に支障が出るので家の周りの塀を低くして中の様子が分かるようにして造られるなど、ここにも過酷な労働が感じ取られる。

大島紬の存在が詳らかになるのは、享保五年（一七二〇年）の紬着用禁止令である。東大寺献物帳の「褐色紬」とともに、大島紬を語る上で具体的な例としてよく用いられる。薩摩藩から奄美大島等四島に下され、身分の高い人達に着用を限定したものである。それ以前は上納品として紬は入っておらず、庶民の日常着として家内生産だった物が贅沢品と見られるようになったのである。本書では、奄美大島の地理的特異性に基づく事象の中での大島紬の変遷がここまで触れられている。

江戸時代から明治にかけては具体的な大島紬の資料もあり変遷が明らかとなる。薩摩藩の上級武士であった名越左源太が、お家騒動に加担した罪で奄美大島へ流刑となり、一八五二年には絵図書調方を命ぜられ当時の奄美大島の生活を『南島雑話』に著している。芭蕉布や紬を作る工程が絵図として表されている。糸芭蕉の茎から糸を作る工程さらにはインドから島伝いに奄美大島に伝わった手括りの緋作りの様子が左源太の手によって描かれている。まだ献上品などに使われた頃である。官業として行われ、一部は人頭税として賦課し、監視の中過酷な労働を課していた。紬の色は泥染、テーチ木（車輪梅）のチップの煮汁と泥田の鉄分で化学反応により発色させた艶やかな黒色である。柄はインド発祥の括りによる防染で作った。文様は中国の綾織（浮織）の影響を受け、それを平織に転化した。島民はこれを「トリキリ」と呼んだ。現在も平織が大島紬の特徴である。平織ながら緋表現で立体的に表現している。当時織機は地機といわれる物で、たて糸は腰に結びよこ糸で織り進めた。明治三十年頃は高機になり、たて糸は機に取り付け、機に取りはずせる板が左右に渡してありそこに座って織るようになった。文様は糸の配列を文字で表していたものを大正時代に方眼紙を使うようになり多様になった。手括りの緋染めから明治四十年に永江伊栄温が、手で括らず機で織る方法を発明し、この発明は大島紬制作の大変換をもたらし、現在にも

繋がっている。これにより精密でち密な緋が作られるが、ち密な緋を合わせて織らなければいい織物にはならない。ち密な緋を合わせて織る「ヌグ」というやり方は、明治二十三年に喜界島の浜上アイが発明した。一度織ってもたてよこの緋は合わない、たての緋糸を緩めて針で調整する方法である。これも現代に繋がっている。文様も昭和二十九年に蚊緋表現が可能になり、点描的表現により曲線表現など限りなく多様化していく。

明治十年頃には、つまり手で括らず機で束ねた糸を織る「締め」や、「ヌグ」が発明される前、既に大島紬の人気はあった。この頃は繭から引き出した真綿を使っていた。その後細かい緋をきれいに作り、きれいに合わせて織れるように不均一な紬糸から玉糸や本絹糸に変わっていく。大正初めの頃である。大島紬は、紬糸を使ってないから大島緋が正しいという意見があるが、紬糸の時代の人気は繋がって名前も繋がった。その風合いは紬糸を使う結城紬と比較され、それぞれの特性としてファンを集めている。昭和初期より染色方法なども進化し、泥藍大島、色大島、夏大島、正藍大島などが生まれ昭和三十二年には白大島が生まれ、多様化して現在に至る。

## おわりに

私事ではあるが、大島紬製造の端初である意匠設計に携わったきっかけは、美術大学で宮本常一氏の民俗学の講義を受け、民族調査をするうちに、調査するより、される側から考えてみようと思った事にある。郷里の大島紬を選び、自分本位で織元を訪ね受け入れてもらった。昭和五十一年、奇しくも大島紬の最盛期である。意匠設計は、色柄を考え方眼紙に作図する仕事ではあるが、販売につながる、つまり売れる物を作っていかなければならない。その時代ごとに新しく生まれた種類や生産量を調べると景気や他のファッションに大きく影響を受けてきたのが分かる。著者の大島紬の洋装化も、着用頻度が高いからと着物でなく最初から洋服に仕立てる方がいるのを見れば合点がいく。市電で着物を仕立て直したであろう大島紬のコートなども見受ける。

何故、大島紬がそんなに人気があるのか。直接、愛好家——数十枚持っている者もいる——たちから聞くと、軽くて着易く疲れないとのこ

と。シワになりにくく濡れても縮まらないから「雨の日は大島紬」というような賛辞を数多く耳にした。色柄も購入の動機ではあるが、それ以上に身体で大島紬の良さを感じているのだ。大島紬はフランスのゴブラン織り、イランのペルシャ絨毯と並び世界の三大織物に数えられている。現在、経済産業大臣が指定する伝統的工芸品（百年以上の歴史を有し、現在も継続しているもの）は、二百三十六品目あるが、大島紬は昭和五十年に法律施行と同時に指定された。

この著書には、大島紬の生まれた奄美大島を地理的視点からとらえ、時には苦難の時代を乗り越え、美しく多くの人々に愛される織物の源流探しが書かれている。表紙のカラフルな大島紬や度々出て来る領巾などから、魅力ある物が人々に影響し触発したということを、多くの資料文献も援用しながら探っている。着物離れに対する洋装化への取り組みも書かれている。地方創生、昭和五十五年頃の一村一品運動やコンゴのサプールという平和運動、南部鉄器の変化などが本書を讀んでいて頭をよぎった。上梓に感謝致します。

（鹿児島地区本場大島紬伝統工芸士会会長）

